

例 言

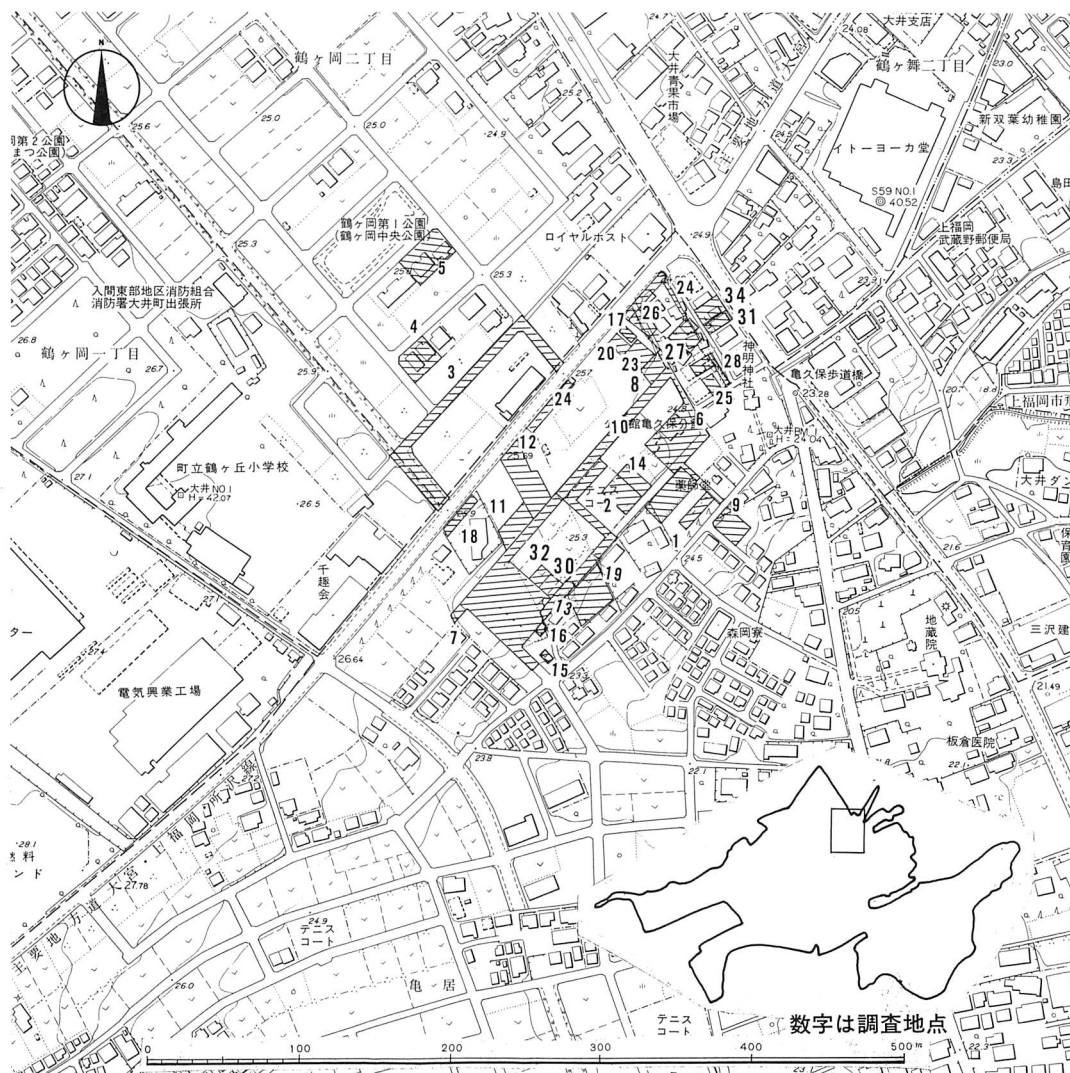
1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、国（1,990,000円）、県（995,000円）の補助金を受け、平成3年4月9日から平成4年3月31日まで実施した。
3. 調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林茂吉
社会教育課長	吉田和子
町史・文化財係長	岩崎保夫
町史・文化財係	坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
発掘調査担当者	坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
4. 本書の執筆は調査担当者があたり、文末に記した。
遺構図版作成は小林登喜江、石器実測図版作成は鍋島直久、土器拓影図作成には整理作業参加者全員の協力を得た。また、本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。
5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏、機関により御指導、ご協力を賜った。
浅野晴樹、荒井幹夫、今井堯、内田賢司、加藤秀之、神木繁嘉、駒井和久、桜井信枝、佐藤正志、笹森健一、田代治、谷井彪、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治（敬称略）
埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町遺跡調査会、大井町立郷土資料館。
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。明記して謝意を表したい。
〈発掘調査参加者〉（敬称略）
会沢泉、浅野昭夫、新井和枝、飯塚泰子、石川与一、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曾根キク子、遠田つる、笠原英子、金子君子、神木光治、小林こずい、小山エミ子、佐久間ひろ子、佐藤至一、佐藤智子、鈴木英子、鈴木エミ子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、戸澤竹二、中嶋末子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、山内栄美子、山下一枝、若尾久美子、若林紀美代。
〈整理作業参加者〉（敬称略）
石垣ゆき子、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、中野和子。

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑 $\frac{1}{60}$ ・炉 $\frac{1}{30}$ ・石器実測図 $\frac{1}{4}$ ・土器拓影図 $\frac{1}{3}$ とした。
2. 遺構図中の細数字は、床面もしくは確認面からの深さ(cm)を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の基準は次のように定めた。
小礫；2.0mm以上、粗砂；0.2～2mm、細砂0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表している。

III 龜居遺跡



第5図 亀居遺跡の地形と調査区 ($\frac{1}{5000}$)

III-1 遺跡の立地と環境

亀居遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐ福岡江川の谷頭部に位置している。標高25～26m。現谷底との比高差は5mを測る。本遺跡をのせる北側の台地は急斜面をなすが、対岸の南側は緩かな斜面を形成している。この緩斜面上には江江南遺跡が立地する。遺跡周辺は、土地区画整理事業により区画道路が縦横にとりつけられ、宅地化が徐々に進んできている。1972年に最初の発掘が行われ、これまでに24地点で調査が実施され、縄文時代中期前半の住居8軒、屋外埋甕2、集石土坑31、土坑103、ピット310が確認されている。遺物は阿玉台式、勝坂式土器が主体で一部五領ヶ台上層期の土器片の出土もある。加曽利E式土器を伴出する遺構の検出はこれまでのところ皆無である。確認された住居等の重複、切り合いはない。（坪田幹男）

(坪田幹男)



第6図 亀居遺跡第24・25・26・27・28・31・34地点遺構配置図 (1/300)

III-2 亀居遺跡第25地点

当遺跡は亀久保特定土地区画整理事業地内にあり、個人住宅の換地に伴い小規模ながら発掘調査が行われてきている。25地点は現状を大きく破壊され調査面積の約40%に達している。精査の結果、本遺跡特有の茶褐色土の包含層がシミ状に見られる箇所は存在したが遺構・遺物は確認されなかった。

III-3 亀居遺跡第26地点

上記の第25地点とは北西に約30m離れた地点である。重機による表土除去後、人力で遺構確認のための精査をおこなった。調査区北側は根切溝が東西に数条認められたが、本遺跡を特徴づける縄文時代中期前半と思われるピット群の一角が10～13m幅で環状にめぐっているのが確認された。また集積土坑が2基検出され、ピット群との関係では、第6・11地点同様の配置をとるようである。

また、調査区中央部に長径450cm×短径300cmの楕円形を呈する落ちこみを確認した。

(1) 7号集石土坑(第7図)

1992年1月に調査をおこなった第28地点と接近する遺構のため、通し番号とした。集石本体の西半部分は、調査区域外のため未調査区である。

推定プランは長径125cm×短径100cmの円形を呈すると思われ、確認面からの深さは45cmを測る。土坑推定プランは長径140cm×短径130cmのほぼ円形を呈し、深さ48cm。その断面は摺鉢状で底面は比較的狭い。中層には焼土粒を含む範囲がほぼドーナツ状に認められ、それらの壁はよく焼けている。礫は北からの流入が顕著で南壁側では比較的希薄である。覆土は2、3層は暗褐色土で3の方がやや暗い。4は明暗褐色土。5はロームブロックを含む暗褐色土。6は黒褐色土を含む暗褐色土。7は6より多く黒褐色土を含む。8はしまりの強い茶褐色土。9は8層に近似し、若干の焼土粒を含む。10は炭化粒を含む暗褐色土。11は焼土粒・炭化材を含む暗褐色土。12は礫を多量に含み、焼土粒を含む黒褐色土。13はいわゆる遺跡全面をおおっている茶褐色の包含層。14は炭化粒を含む暗褐色土。集石土坑は13層を掘り込んで構築されている。

(2) 8号集石土坑(第7図)

集石プランは長径145cm×短径130cmのほぼ円形をなし、深さは50cmを測る。礫は中～下層に集中し濃密である。土坑プランは長径145cmの円形を呈し、深さ50cm。断面は摺鉢状で底面は狭い。焼土と炭化材が顕著に遺存し、とくに炭化材は径10cm、長さ20～30cmのものが見事に残り、それらの集中もやはり中層に多い。壁面は上～中位にかけてよく焼けている。焼け土は1ヶ所に片寄ることなく南北部分に特に顕著であった。土坑の南側には不整形のピット状遺構が確認されたが、土層観察上から本集石がピット覆土を切っている状態である。覆土1は、しまりのない茶褐色土。2は暗褐色土。3は礫を含むしまりの弱い黒褐色土。4は炭化材を多量に含む黒色土。5は焼土粒を含む黒色土。6はロームブロックを含む暗褐色土。

(坪田幹男)



調査区近景



調査風景



集石・土坑プラン検出



調査区全景



8号集石



7号集石



8号集石断面



7号集石断面